

宮良長包の音楽教育活動に関する研究 (8) —教育誌『教育音楽』を手掛かりに—

大山伸子**

Abstract

沖縄県の音楽教育の先達者である宮良長包(1883-1939)は、沖縄県師範学校を卒業後、故郷の八重山島高等小学校を皮切りに、沖縄県師範学校附属小学校、そして、沖縄県師範学校で音楽教諭として教鞭を執った。

大正11(1922)年頃から(沖縄県師範学校勤務の時)何度か上京したようで、日本教育音楽協会主催の音楽講習会を受講。当時の交通事情を考えれば、並々ならぬ意欲が窮えるが、講習会内容やその後の長包への影響の大きさなどは、資料的手掛かりが皆無と思われ、これまでほとんどわかっていなかった。

大正11年、日本の音楽教育者の資質向上のための機運が高まり、「日本教育音楽協会」が発足されることになるが、長包はその立ち上げの会議に、沖縄県から唯一参加していることが、上記「協会」発行の月刊誌『教育音楽』を繙くことで判明した。

昭和9(1934)年には、「夏季音楽講習要領」を長包自身が作成し、自ら講師として沖縄県内の学校教育に普及・寄与している。その資料は、『教育音楽』にヒントを得ていることもわかった。

本論文は、『教育音楽』の大正12年1月創刊号から昭和14(1939)年までの発行を繙くことにより、長包が上京し講習会で学んだことや、日本教育音楽協会との関わりを通して、沖縄県の音楽教育の資質向上にどのように貢献したかを探求する。

さらに、長包は自身が編集した『南島唱歌第一輯』、『宮良長包作曲集』、『琉球の新民謡』の出版が、『教育音楽』に関わりのあった福井直秋や山田耕筰等の協力で実現していることも判明した。

宮良長包は沖縄県の音楽教育に何を求め、何を目指したか、『教育音楽』を手掛かりに、明らかにしたい。

尚、「汗水節」(作詞：仲本稔/昭和4(1929)年)の追加研究について、本稿で補足しておく。

I. 日本音楽教育協会発足

大正12年1月、日本教育音楽協会創立までの経過報告について、『教育音楽』の創刊号に次のように記載されている。(漢字、かな違いは原文のまま)

我が樂界進運は樂界の各方面に各種の施設や會合を起さねばならぬことの如何に大切でしかも急を要する問題であるかを痛切に語るに至つた。—(略)—。講習會員の代表者側からは講習會員の希望として、今後もかかる重要な問題が提出されることもあろうし、また學校音樂に關係ある各種の研究の必要は益其度を高めることでもあるから、此等を攻究する爲に音楽教育者協會の設立は目下の急務であり、これが設立については在京諸氏の努力を願ひたしとの切なる依頼に胚胎して本會は遂に設立の慶びに至つたのである。—(略)—。時恰も

*A Study Of Choho Miyara's Work in Music Education (8)

—Clues from the Education Journal *Kyoiku Ongaku*—

**Nobuko Oyama

大正11年夏期講習會開會の折、多年の懸案を餘りに永びかするは決して得策ではない、一(略)一。

鐵石も溶けんばかりの大正11年8月の3日、午後2時と云ふに上野公園内の東京音楽学校校内は左の諸氏によって訪問せられた。^(註1)

“左の諸氏”は、下記の誌面のように挙げられ、長包が日本教育音楽協会の発足協議会に、はるか沖縄から足を運んで出席していることが判明したのである。^(資料1)

【資料1】『教育音楽』創刊号(大正12年1月31日、p.4)、「日本教育音楽学会」発足の協議会名簿に「沖縄 宮良長包」と記されている。東京藝術大学附属図書館所蔵

重要な問題が提出されることもあらうし、また學校音楽に關係ある各種の研究の必要は益其度を高めることでもあるから、此等を攻究する爲に音楽教育者協會の設立は目下の急務であり、これが設立については在京諸氏の努力を願ひたしとの切なる依頼に胚胎して本會は遂に設立の慶びに至つたのである。以後再三同様な委囑を受けた在京會員は、大同團結を組織して其希望に副ふべしとの願は益々高まるのであり、大正十年の夏期講習會に出席された數名の方々の催促もあつたが機未だ熟せず、遺憾ながら此れが設立を見るに至らなかつた。時恰も大正十一年の夏期講習會開會の折、多年の懸案を餘りに永びかするは決して得策では無い、萬難を侵して此れが實現に努力せよとの切なる依頼に講習會員を中心として在京音楽	者諸氏の協議會を開くに至つたのである。 鐵石も溶けんばかりの大正十一年八月の三日、午後二時と云ふに上野公園内の東京音楽學校校内は左の諸氏によつて訪問せられた。
	四
東京 山形 福島 朝鮮 大坂 熊本 岩手 兵庫 東京 新潟 愛知 石川 鈴木又太郎 齋藤七郎 般二 順吉 清田 竹男 藤原 草郎 澤保 治良 田澤 一 山岸 貞一 福田 登久 友松 東京 東京 愛知 沖繩 香川 三重 福岡 愛知 徳島 宮崎 愛媛 窪田 山田 岡田 宮良 末澤 伊藤 山北小八郎 和田 正木 山本 菱田 弘助 寛 清次 力 長包 信夫 清朝 央 要 三	

II. 『教育音楽』の発行

1. 日本教育音楽協会の設立と『教育音楽』の発行

日本教育音楽協会は、大正11年12月に設立され、大正12年1月31日に『教育音楽』創刊号を発行した。太平洋戦争による一時期活動の中断を経て、戦後、昭和21(1946)年12月

1日に復刊し（教育音楽協会責任発行）、印刷用紙の割り当て事情もあり、編集発行の委託を受けた音楽之友社から戦後第1号として再スタートした。

『教育音楽』の発行は、平成25（2013）年の日本教育音楽協会設立90年を機に平成25年1月号で終止符を打ち、日本教育音楽協会は、平成25年3月に解散した。

日本教育音楽協会設立は、日本教育音楽者の資質向上を急務として立ち上げ、同時に『教育音楽』を発行し、次のことを実施することとしたのだった。^(注2)

- (1) 雑誌を発行すること
- (2) 会員の修養を助成すること
- (3) 他方面の學者達の入會を歓迎すること
- (4) 地方会員の技術を上達せしむるために講習會を開き、一般の音楽趣味を向上せしむる爲に音樂會を開くこと
- (5) 地方に開かれる特別大演奏會に本會々員をして簡便に參聽し得る様取計らはれたきこと、等であった。

上記から、地方の音楽教育者に向けて配慮がなされていることが、一目瞭然である。地方のレベル向上を促し、雑誌発行、講習会開催などをその手だてとしている。

日本教育音楽協会の設立趣旨の最も重要な事項に、音楽教育者の力量を高めることがあった。そのため、年に夏期・冬期の「音楽講習会」を開催し、会場は東京音楽学校（現・東京藝術大学）とした。協会では、遠隔地からの受講者のために、上野駅周辺の宿泊施設の斡旋もしたという。^(注3)

また、尋常小学唱歌講習会には、沖縄県から受講申込み数3、と記されていることが、『教育音楽』で確認することができる。^(注4)

長包も、東京音楽学校に足を運び、講習会で学んでいたとみられる。

また、上記（4）の一環によるものだろうか。昭和11（1936）年、山田耕筰は招聘講師として沖縄県を訪れ、音楽講習会を実施したという^(注5)。その時、講習会会場の騒音に耕筰が腹を立て長包に注意を促した、という当時の受講者のエピソードもある。

長包は、著名な山田耕筰を招き、沖縄県の音楽教育者の資質向上のため、尽力していた。

また、昭和7（1932）年11月、日本教育音楽協会より、全国音楽教育功勞者として表彰されている。受賞メダルは石垣市教育委員会文化課に現在、保存されている。

2. 日本教育音楽協会の会員数

【資料2】の表は、昭和6（1931）年から昭和12（1937）年までの『教育音楽』に記載された資料を整理しまとめたものである^(資料2)。昭和6年以前は『教育音楽』に会員数は記載しておらず、昭和12（1937）年8月以降も記載されていない。

日本教育音楽協会は、『教育音楽』に全国の会員数を掲載し、道府県の順位付けをして会員の増員を促していたようだ。

昭和6年5月号に、「再び会員倍加運動に就いて」と題し、以下の文が示されている。

本會が昨春5月會員倍加運動を起して新會員の募集に着手してから正に1年、幸ひ熱心

なる各位の御援助によって眞に倍加の實を挙げ、今や其の數2千を超過すること百餘名、尚日に日に新しい同志を加へて、本會が益々隆昌に赴き、其基礎の益々疆固になりつゝあることは、口道の爲眞に慶賀に堪へない次第であります。(口は読み取り不可)

然し本會の念願は、各府縣に少くとも百名以上の會員を有して、音樂教育の發展向上の爲大に活躍したい所存であります。現在では東京、長野、神奈川、新潟の他は何れも未だ百名に満たず、宮崎外數縣の如きは僅かに數名に過ぎない状況であるのは、本會の目的貫徹の上からも甚だ遺憾とするところであります。

文中の「宮崎外數縣」に沖縄県も入っており、會員の呼びかけを促している。

會員の存在する府県名について、沖縄県の會員が急増した昭和7(1932)年9月を見てみよう。

會員数の多い順に福島(391名)、東京(306)、愛知(205)、長野(163)、新潟(158)、佐賀(148)、島根(148)、栃木(122)、広島(120)、山形(107)、神奈川(100)、熊本(97)、石川(88)、青森(86)、兵庫(84)、高知(83)、埼玉(82)、福岡(74)、和歌山(73)、静岡(67)、愛媛(66)、沖縄(63)、千葉(60)、北海道(56)、岐阜(53)、香川(52)、鳥取(52)、長崎(51)、山梨(50)、三重(49)、大阪(47)、群馬(46)、京都(46)、岩手(43)、滋賀(41)、山口(41)、富山(34)、台湾(27)、大分(25)、茨城(24)、宮城(20)、岡山(20)、朝鮮(20)、秋田(17)、満州(16)、鹿児島(14)、奈良(13)、福井(12)、徳島(10)、宮崎(9)、樺太(8)、中華民国(4)となっており52カ所に及んでいる。沖縄県は22位で健闘している。また、台湾、朝鮮、満州、樺太、中華民国からの入会者は時代をしのぼせる。

【資料2】沖縄県の會員数 『教育音楽』昭和6年から昭和12年掲載より作成

年 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
昭和6年		15	14	14	14 (3)	14	14	14	14	15 (1)	16 (1)	16
昭和7年	13 (2)	12 《1》	12	12		13 (1)	13		63 (50)	a63	b64 (1)	64
昭和8年		59 《5》		55 《1》	56 (1)	56	56	c55 《1》	d58 《1》			57
昭和9年	56 《1》	53 《3》	e53	f53	52 《1》	52	52			52		51
昭和10年	51	49 《1》	48 《1》	47 《1》	47	47	47	47	56 (10) 《1》	56	56	56
昭和11年	56	56	g55 《1》	h55	55		55	54 《1》	i54	j55 (1)	k55 (1) 《1》	55
昭和12年	l54 《1》	m55 (1)	n54 《1》	O54	54	52 《2》	52					

注：() は入会数 《 》 は退会者数
 空欄は原本記載なし、または不明
 斜線は會員数記録なし

* 誤記と思われる箇所

- a 及び b b の 11 月号も 10 月 15 日と記載されている
c 及び d d の 9 月号も 8 月 10 日と記載されている
e 及び f f の 4 月号も 3 月 20 日と記載されている
g 及び h h の 4 月号も 3 月 17 日と記載されている
i、j 及び k j (10 月号)、k (11 月号) も 9 月 20 日と記載されている
i 及び m m の 2 月号も 1 月 20 日と記載されている
n 及び O O の 4 月号も 3 月 20 日と記載されている

沖縄県の状況を見てみると、昭和 6 年の 10 名台から、昭和 7 (1932) 年 9 月に一気に急増し 63 名になっていることがわかる。『教育音楽』の昭和 7 年 10 月 1 日発行によると、「新会員紹介感謝」として「宮良長包君と久木原定助君から沖縄県で 50 名」(p.66) とあり、急激に増えた 9 月のデータと合致している。

昭和 7 年の 11 月、12 月でピークの 64 名になっているが、昭和 10 (1935) 年 4 月から 8 月まで 50 名台を割り、再び昭和 10 年 9 月に一気に 10 名増員し 50 名台に達している。その後は 50 名台を維持している。

昭和 7 年 9 月に急増した理由として、前文掲のような協会の会員増員働きかけに長包が主体的、精力的に呼応した結果だったのだろう。

宮良長包が自身の研究や指導方法を学ぶため、日本教育音楽協会主催の講習会を受講し関わっていたことは確かである。

Ⅲ. 長包の出版物と『教育音楽』

1. 『南島唱歌第一輯』は昭和 2 (1927) 年、共益商社書店から発行され (東京)、9 曲収録されており、その序文を福井直秋 (1877-1963・教育音楽者) が寄稿している^(注6)。福井は、日本教育音楽協会の理事を務め、日本の音楽教育界を牽引、『教育音楽』にも多大な貢献をした人物で、武蔵野音楽学校 (現・武蔵野音楽大学) の創立者でもある。日本教育音楽協会主催の音楽講習会の講師も務めたようで、おそらく、講習会を通して、長包が薫陶を受けた一人であろう。

福井直秋の簡潔な序文が記述されている。^(資料3) (漢字、かな遣いは原文のまま)

【資料 3】『南島唱歌第一輯』共益商社書店、昭和 2 (1927) 年、東京藝術大学附属図書館所蔵

序文

宮良君は我が音楽教育家中稀に見る篤學者であつて、また沖縄民謡の熱烈なる研究者であり、健實なる作曲者である。予は君の紹介によって沖縄民謡の典雅なるを愛し、優麗なるを喜んでゐること既に歳久しいのである。であるから南島唱歌の刊行については衷心からこれを欣懐とし、著者の勞を多とすると共に、優しい聲、美しい聲で、南島は申すまでもなく、廣く全國に響き渡るに相違ないと信ずるものである。

昭和二年八月

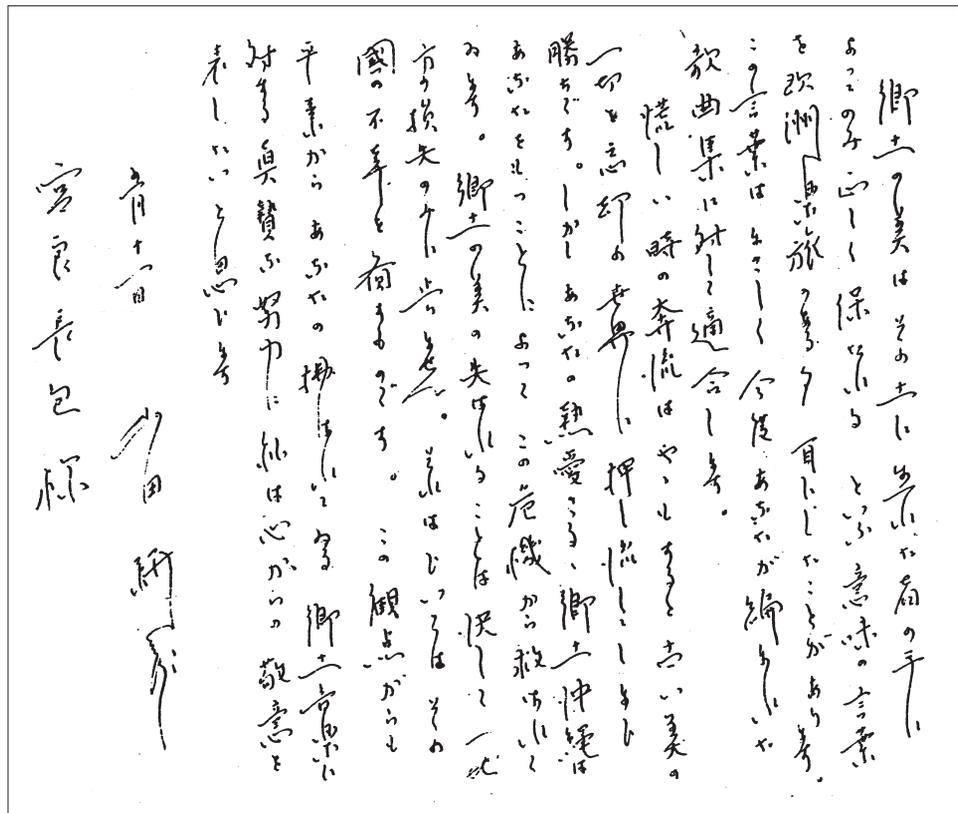
東都 福井 直秋

長包作曲の「孤児」(大正15年)は、福井直秋の作詞である。また、「鳩間節」のピース版(共益商社書店発行、大正11年)の印刷発行にも福井は、支援を惜しまなかったという。

2. 『琉球の新民謡』は昭和11年7月、大阪開成館から発行、12曲収録されており、山田耕筈の序文が直筆のまま印刷されている。^(資料4)

山田耕筈(1886-1965・作曲家)は長包が作曲した「なんた浜」を、「宮良音楽の白眉だ」と激賞したという。

【資料4】『琉球の新民謡』大阪開成館(昭和11年)山田耕作直筆の序文、石垣市立図書館所蔵



上記原文を現代漢字・かな遣いに直したもの

郷土の美はその土に生れた者の手によってみに正しく保たれる、という意味の言葉を欧州楽旅のある夕、耳にしたことがあります。この言葉はまさしく今度あなたが編集した歌集に対して適合します。

慌しい時の奔流は、ややもすると古い美の一切を忘却の世界に押し流してしまい勝ちです。しかし、あなたの熱愛さる郷土沖縄は、あなたを持つことによってこの危機から救われています。郷土の美の失われることは、決して一地方の損失のみに止りません。それはひいては、その国の不幸をもたらすものです。この観点からも平素から、あなたの払われている郷土音楽に対する真摯な努力に、私は心からの敬意を表したいと思います。

5月11日

山田耕筈

宮良長包様

3. 「夏季音楽講習要項」と『教育音楽』

「夏季音楽講習要項」(宮良長包／金城侍英共編、国吉弘文堂発行、昭和8年4月発行)は、音楽講習会用に作成したものであるが、『教育音楽』を参考にして作成しているところがみられる。両者の共通点や相互示唆の関係が以下の箇所に見うけられる。

(1) 音楽教育の郷土化

「夏季音楽講習要項」の第1章6節には、「音楽教育の郷土化につき」と題して、「何所で=場所…日本で…沖縄で…郷土主義」とし(p.7)、現今音楽の動向として、「世界楽況、日本楽況、沖縄音楽の状況、郷土主義の根本義」へと導き説明している。

長包は、沖縄の民謡やわらべ歌、八重山古謡のユンタ・ジラバを採譜し、それを元歌に「琉球木遣歌」「なんと浜」「唐船」「鷺の鳥」「荒磯の歌」など、数多く作曲し、それを学校で教材化し指導した。

長包は、本土や世界を視野に入れた上での郷土の音楽教育の構想を持っていたことがわかる。

『教育音楽』においては、「郷土に立てる唱歌教育①」(昭和7(1932)年9月号、p.14～34)、「郷土に立てる唱歌教育②」(昭和7年10月号、p.37～45)と題し、郷土民謡、特に童謡やわらべ歌の教材化を推進している。

さらに、『教育音楽』では、「郷土の音楽性に基く音楽教育」(昭和10年8月号、p.42～46)が掲載されているが、長包は「夏季音楽講習要項」で郷土音楽に立脚した指導の大切さを説いており、それは、昭和8年4月発行であるから、むしろ、『教育音楽』は、長包に鼓舞されるかたちで、「音楽教育の郷土化」が存在するように窺えもする。

(2) 生活指導と音楽教育

「夏季音楽講習要項」の「第6節の現代教育思想より見た音楽教育」(p.7)の内容は、『教育音楽』の「生活指導と音楽教育」項目とほとんど同じである。(昭和8年4月、p.27)。

音楽教育を労作教育と郷土教育に分類し、さらに、労作教育を精神的労作とし、労作教育を表情的、身体的労作(鑑賞・体験・創作・訓練)、郷土教育を郷土的唱歌、郷土童謡、子供の生活歌と細分化している。

(3) 『教育音楽』の長包関連トピック

昭和7年7月号(p.56～57)によると、日本教育音楽協会は地方委員委嘱の内規ができてそこに、「沖縄県から宮良長包君と久木原定助君」と記載がある。

沖縄県の会員増加が9月号の63名であるから、委嘱時期と一致しており、長包の実績が評価されたのではないだろうか。

また、日本教育音楽選として「非常時日本の歌」(作詞・作曲不明)が掲載されているが(昭和8年8月号)、長包の作曲にも「非常時日本の歌」(作詞：藤村作、昭和9年)がある。両方とも旋律は不明であるが、偶然に同名なのか、今後、その糸口を見出し明らかにしたい。

IV. まとめ

1. 長包の音楽教育観

長包は、生涯・音楽教諭として学校現場に立ち、子どもや生徒たちにふさわしい音楽は何であるかを研究しながら実践した教育者である。中央のレベルを意欲的に学ぶ一方で、沖縄県の音楽教育の将来を見据えていたことが、『教育音楽』を通して知ることができる。

長包の音楽教育の基盤は郷土音楽であり、それは、長包の音楽教育観をブレのない、確固たるものにしたのであろう。例えば、沖縄方言の標準語励行のために「発音唱歌」を作曲し、沖縄民謡を元歌にした「琉球木遣歌」を手掛け（混声合唱曲／当時は男女席を同じゅうせずの時代）、常に足元の音楽、生活に即応した郷土音楽に目を向けた音楽教育者であった。

『教育音楽』を繙くことにより、改めてこのことを確認することができた。

2. 長包音楽を未来へ

過年、筆者は宮良長包研究の一環として、沖縄県の幼稚園・小学校・中学校・高校の791校の音楽教諭に、「宮良長包の音楽実践」についてアンケートを取ったところ、幼稚園は28.8%、小学校は37.8%、中学校は44.9%、高校70.4%という実践率であった。実践していない理由として、教材や資料が少ない、時間配分の難しさ等が挙げられている中で、「宮良長包の音楽をよく知らない」という回答も上位を占めていた。^(注7)

「宮良長包の音楽をよく知らない」という実情をどのように克服しなければならないか、調査データを通して知ることとなった。

「えんどうの花」は世代を超えて歌い継がれている名曲であるものの、親しまれている曲は、長包のレパートリー170曲（現在判明数）の中で、ごく一部だろう。

長包の音楽観は、郷土音楽に立脚したものであり、バトンをつなぐべき私たちは、より良質に凝縮された「長包音楽」の実践も模索する必要があるようだ。

長包の作曲活動は、子どもの感性に合った音楽創作であり、「教室から発信」されたものである。それを「教室に戻す」ことが、子どもたちに歌い継ぎ、未来へつなぐことにならないだろうか。

V. 「汗水節」の追加研究

「汗水節」については、拙稿「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（5）—作品研究Ⅱ（昭和前期篇）—」（沖縄キリスト教短期大学紀要第36号、2008、p.45）で書きまとめたが、最近、新事実が確認されたので、本稿で補足しておきたい。

1. 楽曲について

昭和4（1929）年に作曲された「汗水節」は、これまで2/4拍子、へ長調、24小節（前奏繰返し含む）と認識されてきた。これまで出版された作曲集で「汗水節」が収録されている、『宮良長包作曲集』（譜久村エミ楽譜、プロジェクト・オーガン出版、1980、p.33）、『宮良長包作曲集』（譜久村エミ楽譜監修、琉球新報社、1991、p.11）、『宮良長包作曲全集』（大山伸子編・校訂、琉球新報社、2003、p.76）においても、2/4拍子、へ長調、24小節とされている。

ところが最近、昭和4年当時に学校や市町村役場、官公庁などに配布されたガリ版刷り

の楽譜（コピー）が確認できたのである。^(楽譜1・2)

いきさつは、昭和4年、迫りくる戦争の足音をいち早く察して、北部の伊是名国民学校に転勤した大城政秀教諭が、戦時中そのコピーを音楽帳に数枚はさんで大切に保管していたものという。戦争被害のなかった伊是名島であったため、幸いにも楽譜は無傷であった。

それは、作詞者仲本稔の長男、薫氏（八重瀬町具志頭在住）が、稔氏の遺品を整理したところ見つかったもので、作品の事実確認のため、筆者と三木健氏（宮良長包研究家）が立ち会った。（2013/11/13）

その楽譜を見てみると、4/4拍子、へ長調、12小節（前奏繰返し含む）となっており、これまで認識されてきた2/4拍子の拍子感と異なる^(楽譜3)。拍子が異なれば曲想や演奏が異なるわけで、今後、「汗水節」の楽譜の拍子を、どのように判断するかである。

- (1) 長包自身が編集した作曲集に「汗水節」は、収録されておらず確認ができない。
- (2) 当時、学校や市町村役場、官公庁などで配布されていた今回の楽譜は、昭和4年で^(注8)、作曲された時期に近い。
- (3) ガリ版刷りで記譜をした者は不明だが、きわめて正確に書き込まれており、音楽に通じた者であると推測される。
- (4) これらの条件から、原楽譜も4/4拍子であると推測でき、4/4拍子が正しいと解釈することが自然である。
- (5) 筆者は本論文をもって、4/4拍子としたい。

2. 歌詞について

作詞者は具志頭村出身の仲本稔であるが（作詞年は昭和3（1928）年）、原詩名は「勤儉力行の奨」である。長包が作曲を手掛けて楽曲が完成すると、「汗水節」と改題された。（作曲年は昭和4年）

上記において楽曲の解釈について述べたが、歌詞についても、これまでとは異なった箇所が見つかった。

歌詞は1から6番までであるが、そのうち5番について、以下の通りである。

※これまでの歌詞

ゆ とっしわし 老ゆる年忘てい	すだ な ぐわ 育ていたる生し子
ていしみがくむん 手墨学問む	ひろ 汎く知らし（汎く知らし）
ユイヤサッサ	汎く知らし

※ガリ版刷り（今回発見）の歌詞

ゆ とっしわし 寄ゆる年忘てい	すだ な ぐわ 育ていたるなしぐわ
ていしみがくむん 手墨学問も	ひろ 汎く知らし（汎く知らし）
ユイヤサッサ	汎く知らし

5番の「年を重ねる」という意味では、「老ゆる」ではなく、「寄ゆる」が正確だという解釈である。作詞者の仲本稔が遺した資料も「寄ゆる」とあり^(注9)、長男の仲本薫氏や、「八重瀬町文化協会」「汗水節保存会」など団体は、今後、「寄ゆる」を普及させたいと判断しており、作品解釈として演奏上も、歌詞5番は「寄ゆる」とすることが、作詞者・仲本稔氏の表現を尊

重することになるのではないだろうか。

【楽譜1】 「汗水節」 最近確認され昭和4年に学校・官公庁に配布された85年前の楽譜
C=4/4拍子、ハ長調、12小節（前奏繰返し含む） 具志頭歴史民俗資料館所蔵

汗 水 節

仲本 稔作歌
宮良長包作曲

(=度目ヨリ一回)

二拍子
三拍子

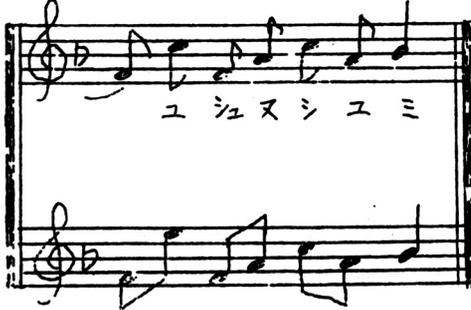
アシミヂユナカ

チハタラチュルヒトヌ ククルウリシサヤ

ユヅマシユミ ユヅマシユミ ユイヤサッサ

【楽譜 2 及び歌詞】 12小節目の楽譜及び歌詞 5 番は「寄ゆる」となっている

II



(昭和三年)

御大典記念當選民謡(三等)

島尻郡具志頭村仲座青年分團員
仲本 稔

勤儉力行の奨

- 汗水ゆ流ち、働らちゆる人の心うれしきや
與所の知ゆみ、
- 一日に五十^{ガン}百日に五貫守てそこねるな^い、
廿日^ハ言葉^ホ、
- 朝夕働らちよて積ん立てる錢^{カネ}や若松の盛い、
年と共に、
- 心若々と朝夕働きは五六十になても、
ハタチ^ハ二十歳^ハさらみ、
- 寄ゆる年忘て育てたるなしぐわ
手墨^{テノミ}學問^{ガク}も^ヒ汎^ヒく知らし
- ^{ウマシ}公衆の爲も、我が爲ゆと思て、百勇^ヒみいざで
妻^メ並^ヒしみしより

縣社會課

3. 【楽譜 1・2】 「汗水節」について

この楽譜は戦火を逃れた貴重なものである。『沖縄の風土に生きる汗水節』(p.64~67)の大城政秀氏の文章によると、「昭和4年2月、『汗水節』が当選して、各学校、各市町村役場、各官庁に配布されました。兼城小学校にも配布され、小生が保管して、昭和5年の高等科2年、昭和7年の高等科2年にオルガンで教え、学芸会に男女で斉唱しました (略)」。昭和18年1月、先に兼城小学校で受取った、汗水節の歌曲の紙を音楽帳にはさ

んで、伊是名国民学校に転勤しました。沖縄では、嘉数の自宅においてあった書籍類は家屋とともに全部焼けましたが、伊是名島は戦争被害はありませんでしたので、汗水節の楽譜は健在でした。

上記の文章は、「県下の各学校や各市町村役場、官公庁に配布された」とあり、戦火を逃れ、伊是名島で音楽帳に挟んでいたため生き残った楽譜（【楽譜1・2】）なのである。

昭和4（1929）年の85年前の楽譜で、読み取り難い箇所はあるが、大変、貴重な資料である。

【楽譜3】現在、共通認識・解釈され演奏されている2/4拍子の楽譜であり、その楽譜も掲載しておく。（大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』、p.76）

あし みじ ぶし
汗水節

仲本 稔 作詞
宮良長包 作曲

【報告】 本論文は、2013年度「宇流麻財団研究助成」に拠るものです。

【謝辞】 沖縄県音楽教育研究会前会長・上間順一氏、仲本薫氏、大城政明氏、東京藝術大学附属図書館、東京藝術大学同声会、沖縄県公文書館、八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館、石垣市立図書館、沖縄キリスト教学院図書館に深く感謝申し上げます。

【注】

- (1) 『教育音楽』日本教育音楽協会・創刊号、大正12（1923）年1月、p.3～5
- (2) 『教育音楽』日本教育音楽協会創刊号、大正12年1月、p.6
- (3) 『月刊誌「教育音楽」で辿る「協会90年の歩み」』日本教育音楽協会、平成25（2013）年、p.77
- (4) 『教育音楽』日本教育音楽協会、年（不明）9月、p.66
- (5) 三木健著『宮良長包の世界』南山舎、2004、p.287
- (6) 宮良長包作曲「南島唱歌第一輯」昭和2年、共益商社書店
- (7) ①大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性（1）—幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて—」沖縄キリスト教短期大学紀要第38号、2010
②大山伸子「沖縄県の小学校における宮良長包音楽の実践状況と方向性（3）—小学校音楽担当教諭へのアンケート調査に基づいて—」沖縄キリスト教短期大学紀要第40号、2012
③大山伸子「沖縄県の中学校・高校における宮良長包音楽の実践状況と方向性（4）—中学校・高校音楽担当教諭へのアンケート調査に基づいて—」沖縄県立芸術大学紀要第20号、2012
- (8) 『沖縄の風土に生きる汗水節』汗水節記念誌編集委員会、p.66
- (9) ①『沖縄の風土に生きる汗水節』汗水節記念誌編集委員会、p.205
②『具志頭村史 第3巻』具志頭村史編集委員会、平成5（1993）年、p.54

【資料】

- (1) 『教育音楽 創刊号』日本教育音楽協会発行、大正12年1月、p.4
- (2) 『教育音楽』創刊号～昭和14年6月発行分調べ（6月長包没）。大正13年～昭和3年は資料が欠落
- (3) 宮良長包作曲「南島唱歌第一輯」共益商社書店、昭和2（1927）年8月
- (4) 宮良長包「琉球の新民謡」大阪開成館、昭和11（1936）年7月

【楽譜1・2・3】

- (1) 「汗水節」楽譜と歌詞、昭和4（1929）年、沖縄県内の学校、市町村、官公庁に配布されたコピー
- (2) 「汗水節」12小節目楽譜、及び歌詞
- (3) 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』琉球新報社、2003年

【参考文献】

- (1) 「汗水節の心」八重瀬町教育委員会、平成25（2013）年
- (2) 三木健/大山伸子編著『沖縄教育音楽論「宮良長包著作集」』ニライ社、2004
- (3) 宮良長包「宮良長包創作作曲集」共益商社書店、昭和11（1936）年2月
- (4) 「夏季音楽講習要項」（宮良長包・金城侍英編）国吉弘文堂、昭和8（1933）年7月
- (5) 『宮良長包作曲集』譜久村エミ楽譜、プロジェクト・オーガン出版、昭和55（1980）年
- (6) 『宮良長包作曲集』譜久村エミ楽譜監修、琉球新報社、平成3（1991）年
- (7) 『宮良長包作曲全集』大山伸子編・校訂、琉球新報社、2003
- (8) 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（5）—作品研究Ⅱ（昭和前期編）—」
沖縄キリスト教短期大学紀要第36号、2008、p.39～58
- (9) 三木健『宮良長包の世界』南山舎、2004